

多義オノマトペの意味・用法の記述と指導の試み

—「ごろごろ」「ばたばた」を例として—

三上 京子

要旨

本稿は、日本語の多義オノマトペの意味・用法の記述とその指導法について考察したものである。まず、多義とは何か、多義オノマトペとはどのようなものを概観する。次に、従来の辞典や教材における記述法とその問題点を考察した上で、「ごろごろ」「ばたばた」という多義オノマトペを例に、その複数の用法と意味のリンクを図の形で一覧にすることを試みる。また、文型指導において重要であるとされる「文脈化」という概念を紹介し、それが語彙指導にも有効であるという考え方を、多義オノマトペを例に示す。これらをもって、オノマトペ指導、広くは語彙教育全般に対する一つの方向性を提示する。

キーワード：多義語 多義オノマトペ 意味・用法のリンク 語彙指導 文脈化

1. はじめに

日本語は、擬音語・擬態語などのいわゆるオノマトペを豊富に持ち、また、それらによって非常に豊かな表現が可能となっている言語である。しかし、これまでの日本語教育において、オノマトペは、初級ではもちろん、中・上級になっても体系的に指導されることは少なかった。また、オノマトペは、非常に感覚的な言葉であるがゆえに、母語話者にしか習得し得ないかのような印象を持たれていることも事実であろう。

中でも、意味や用法を複数持つ多義オノマトペは、学習者にとって習得が困難なものの一つであると思われる。そこで、まず、これらの多義オノマトペが、従来の辞典や学習者向け教材等においてどのように記述されてきたか、そこにどのような問題があるかを考察する。その上で、学習者によりわかりやすい形で提示するために、複数の意味・用法を図の形で一覧にして示すということを試みる。また、語彙の指導にも、文型の指導同様「文脈化」という概念が重要であると考え、多義オノマトペ指導の具体的方策についても提示する。

2. 多義オノマトペ

2.1 多義語とは

国広(2002,pp.164-165)によれば、多義とは、「ある同一の音形に複数個の互いに意味的に区別される意味が結び付いている時、その意味が意味的に関連を持っているか、あるいは意味的に関連を持っていなくても同一の認知対象に基づいていると見られる場合には、全体で一つの多義語を構成する」と定義される。多義は、原義から派生義への意味の転用、拡張という現象である。

多義語の一例として、「手」という本来、身体部位を表す語には、①生物の手(例：サルは2本の手をもつ)、②形の上で手に類するもの(例：孫の手で背中をかく)、③手の様々な働き(例：無農薬栽培は手がかかる)、④方向(例：右手に見えるのが皇居です)、⑤手段(例：これで失敗したら次の手を使おう)の5つの語義が立てられるという。しかし、「手」における意味の派生をたどっていくと、そこには「機能」と「形態」という二つの認識が土台になっていると考えられる。²⁾このように「多義語」は、まず何らかの土台になる意義素があり、そこから意味の派生・拡張が起こり、複数の意味をもつようになったと考えられるのである。

2.2 日本語の多義オノマトペ

日本語のオノマトペは、一般に「擬音語」と「擬態語」に分けられることが多いが、金田一(1978)は、これを意味的にさらに細かく分類し、人間や動物の声を表す「擬声語」、事物の音を表す「擬音語」、無生物の状態を表す「擬態語」、生物の状態を表す「擬容語」、人間の心理状態を表す「擬情語」の5つに分類している。以下がそれぞれの語例である。

「擬声語」：ワンワン、モー、オギャー、ぺちやくちゃ、ぼそぼそ等

「擬音語」：ザーザー、ガチャン、ゴロゴロ、バターン、どんどん等

「擬態語」：きらきら、つつつ、さらっと、ぐちゃぐちゃ、どんより等

「擬容語」：うろうろ、ふらり、ぐんぐん、ばたばた、ボーッ等

「擬情語」：いらいら、うっとり、どきり、しみり、るんるん等

ここで、あるオノマトペが「多義」であるというのは、これら5つの意味的な分類のうち、2つ以上の意味分類にあてはまる用法を持つときであると考えられる。例えば「どんどん」というオノマトペは、「太鼓をどんどん叩く」というときには具体的な物の音を表す「擬音語」であり、「仕事がどんどんはかどる」という例においては事物の様態を表す「擬態語」である。この二つの文において、「どんどん」はそれぞれまったく異なる意味を表すかに見えるが、実は一つの原因から派生したと思われ、それらの意味の間に有契性が認められるのである。³⁾

『外国人のための基本語用例辞典』には、約4,500語の見出し語が載せられているが、巻末に「擬音語・擬態語」として193語が挙げられている。そのうち、意味が複数記述されているものは88語である。すなわち、この辞典に限って

えば、全体の半数弱が多義オノマトペであると言える。この 88 語のうち、日本語教育の比較的早い段階から提示されると思われる多義オノマトペとしては、以下のようなものがある。⁴⁾

かさかさ	がたがた	かちかち	からから	がらり	かんかん
がんがん	きりきり	ぐらぐら	ぐるぐる	ごたごた	ごろごろ
さっぱり	ずるずる	だらだら	どンドン	ばたばた	ぼったり
ぱっと	ばらばら	ぱらぱら	ぼりぼり	ぴったり	ぴりぴり
ぶくぶく	ぶつぶつ	ぶらぶら	ふわふわ	ぷんぷん	ぺこぺこ
べたべた	ぺらぺら	ぼつぼつ	ぼつぼつ	ぽんぽん	ぼんやり

2.3 多義オノマトペの意味・用法の広がり

では、上述したような「多義」オノマトペが、実際どのような意味と用法の広がりを持つのかを「ごろごろ」を例に見てみる。『擬音語擬態語使い方辞典』には「ごろごろ」の項に以下の5つの意味とその用例があげられている。⁵⁾

(1) 雷が鳴る音。また、雷が鳴るような音。

(例)遠雷がごろごろと鳴りながらだんだん近づいてくるようだ。

(2) かなり重量のある物体や肉体が連続してころがるようす。

(例)ダンボール箱を傾けると、みごとなジャガイモがごろごろころがり出た。

(3) 働かないで時を過ごすようす。何もしないで時を過ごすようす。

(例)失職していなかの親元に帰り、1年ほどごろごろと暮らしていた。

(4) たくさんありすぎて珍しくも貴重でもないようす。

(例)あの程度の美人なら、東京じゃごろごろいるよ。

(5) かたまりや異物がはいり込んでいて違和感を感じるようす。

(例)ごみがはいって目がごろごろする。

次に、オノマトペの文中における働き、すなわちオノマトペの統語的機能という観点から考察する。田守・ローレンス(1999,p.47)は、「日本語オノマトペは、統語的に副詞、動詞、名詞、形容詞／形容動詞として働くことができる」としているが、ほとんどすべてのオノマトペが、「様態副詞」として機能することが知られている。そして、多義オノマトペにおいては、様々な意味を持つということがすなわち、文中においても様々な機能を果たしているということになる。以下に「ごろごろ」の統語的機能とその用例を示す。⁶⁾

a. 副詞用法 例：雷がごろごろ鳴っている。

b. 動詞用法 例：休日は家でごろごろするのが一番だ。

c. 名詞用法 例：ごろごろ様におへそをとられるよ。(「ごろごろ」は幼児語で雷のこと)

- d. 名詞修飾用法 例：ごろごろの岩があちこちに転がっている。
- e. 形容詞的用法 例：登りはずっと石がごろごろした道が続いていた。

3. 多義オノマトペの意味・用法の記述

3.1 辞典における記述の問題

学習者にとって多義オノマトペの習得が困難であるとしたら、その理由の一つとして、上に見たような、意味や用法の多様性ということが挙げられると思う。では、実際に、多義オノマトペ「ごろごろ」の意味や用法は、どのように説明されているだろうか。別の辞典の例を見てみよう。

『現代擬音語擬態語用法辞典』では、多義オノマトペ「ごろごろ」に4つの意義素があるとして、それらを導く用例として以下のようなものを挙げている。⁷⁾ (以下の用例は、すべて原典に記載されている通り)

- (1) 比較的大きくて重いかたまりが連続して立体的に回転する様子を表す。
 - ①丸太をごろごろ転がして運ぶ。
 - ②箱がこわれてリンゴがごろごろっと転がり出た。
 - ③子供たちは床をごろごろと転がり回った。
 - ④ちょっと掘ると大きなイモがごろごろ取れる。
 - ⑤アザラシが岩場でごろごろと日光浴をしている。
 - ⑥洪水が引いたあとごろごろの岩があちこちに置き去りにされている。
 - ⑦その道は石ころだらけのごろごろした道だ。
 - ⑧今日はだるくて一日中ごろごろしていた。
 - ⑨若い者が家でごろごろしてちゃいけないね。
- (2) 重いものを転がすときに摩擦する音を表す。
 - ①ごろごろと石臼をひいてソバを粉にする。
 - ②遠くで雷がゴロゴロと鳴っている。
 - ③猫は目を細めてごろごろのどを鳴らした。
 - ④冷たい牛乳を飲むと腹がごろごろする。
 - ⑤(子供に) ほらゴロゴロが来るよ。
- (3) 異物がいくつも当たって不快である様子を表す。
 - ①コンタクトレンズにごみが入ってごろごろする。
 - ②縫い目がごろごろして痛い。
 - ③リュックの中身が背中にごろごろ当たる。
- (4) 同類の物が多数存在する様子を表す。
 - ①工房には傑作がごろごろ転がっていた。
 - ②あの程度の小説は世の中にごろごろあるね。

③かわいいアイドルだって、世の中掃いて捨てるほどごろごろいるじゃないか。

さてここで、用例(1)の①～③から、「比較的大きくて重いかたまりが連続して立体的に回転する様子」という意義素が導かれるというのは明らかである。しかし、(1)の④と⑤の「イモが取れる」「アザラシが日光浴する」ときの様相は、「立体的に回転する」という説明からは少し離れていると思われる。そして(1)の⑥と⑦においては、今「回転している」のではなく、ある物体が「回転した」のち、そこに放置された結果の状態を表していると言える。さらに(1)の⑧や⑨になると、そこには抽象的・心理的な意味要素が加えられているわけで、(1)の元の意義素とはかなりの隔たりを感じざるを得ない。実際、用例の①から⑨においては、多義的意味の派生・拡張が連続的に見られると思われるのだが、そのことが、ここに挙げられている用例とその解説だけでは、十分に伝えられているとは言えない。

2.3 で挙げた、『擬音語・擬態語使い方辞典』では、同じ「ごろごろ」の意味を5つに分類しているわけだが、それらにおいても、多義的意味の派生・拡張が連続的であり、かつお互いに関連性があるという様子は見てとれない。このように、多義語において、複数の意味・用法が連続的につながっているとすれば、始めにいくつかの意味に分類して各々に該当する用例を挙げるにしても、多くの用例から帰納的に意義素を導いて分類するにしても、それらの分類によって多義オノマトペの意味の全容を示すには限界があるように感じられる。

3.2 オノマトペ教材における記述の問題

次に、オノマトペは視覚・聴覚などの感覚に訴える語群であることから、言葉による説明を補う方法として、絵や写真教材でその使われる状況と意味を示すということもよく行なわれている。また、ビデオなどの映像教材によって、音声や動きを伴った映像で見せることによって、オノマトペの意味を示すという試みもなされている。次に挙げるのは、オノマトペの絵教材の例である。

[絵 1]



『絵で学ぶ擬音語・擬態語カード』より

さて、この絵からどんなオノマトペが思い浮かぶであろうか。実は、これは「べたべた」を表す絵である。そして絵の裏には「意味」として、「物の粘り気が強い様子」、「過度に人に甘えたり甘やかしたりする様子」、また「例文」として「綿あめを食べて、口も手もべたべたになった」、「隣の新婚さんは人前でもべたべたするんだそうだ」などの解説がついている。⁸⁾ たしかに、綿あめを食べるとき、それが手や口の周りに付くと「べたべた」するというのは、私たちが経験していることである。しかし、この絵を数人の母語話者に見せたとき、連想される語として「ふわふわ」を挙げた人のほうが多く、「べたべた」という語はなかなか連想されなかった。また、外国人学習者の中には、実際に綿あめを食べたことのない人もいると思われ、そうなるますます、この絵によって「べたべた」の意味を伝えるのは難しいのではないかと思われる。さらに、「べたべた」というのは、何か粘着性のあるものが体の一部や衣服につき、そこにある種の不快感を覚えるというときに用いられる語である。ところが、この絵の中の人物の表情には、むしろこれからおいしそうな綿あめを食べるという「期待感」が表されているように見える。このことも「べたべた」を想起させにくくしている原因だと思われる。

ところで、「べたべた」には、上の絵で示された意味も入れると、以下のような3つの意味があるとされる。⁹⁾

(1) 物が粘りつくようす。また連続してはりつくようす。

(例) 子供がこぼしたジャムがテーブルのあちこちにべたべたくっついて始末が悪い。

(2) 一面にたっぷり塗ったり、連続してはったりするようす。

(例) 塀にこんなにべたべたとビラやポスターをはりつけられて、よく家の人 が黙っているもんだ。

(3) 愛情を濃厚に示すようす。

(例) 一人息子だというのでべたべた甘やかして育てたから、手に負えないどころ息子になってしまった。

さて、これらの意味のうち、(3)のように意味が抽象的に転化しているものは、絵によってその意味を視覚的に示すというのはなかなか困難であると思われる。このように、絵教材は、その語の意味が一つであり、かつ具体的である場合にはかなり有効であるかもしれないが、複数の意味を持つ場合には、そのうちのある一つの意味だけを切り取った形で示すことになり、その語の持つ意味や用法の全体像をつかませるには適していない。

では、どうすれば多義オノマトペの意味とそれらの関連性、またそれぞれの具体的な用法を学習者にわかりやすく示すことができるだろうか。次節以降でそのための一つの方策を試案として示したい。

4. 多義オノマトペの意味・用法記述の試み

呂(2003,pp.15-17)は、オノマトペが「イメージ喚起度の高い言葉」であり、「オノマトペの理解には、メトニミーリンクやメタファーリンクといった比喩の理解の認知プロセスが必要である」としている。また、そのようなリンクを活性化させるには日常的経験のスクリプト知識が重要な役目を果たしているとし、「ころころ」が、「ころころ転がる」のような具体的動的事象から、「ころころとしたジャガイモ」のように静的な表現へ、さらに「ころっと変わった」のような抽象的事象へと拡張されるに至る認知プロセスを解明している。すなわち、オノマトペが「多義語」として複数の意味を持つというとき、その意味の派生や拡張には比喩的理解の認知プロセスが存在し、派生・拡張されたそれぞれの意味は、互いにリンクしていると考えられるのである。¹⁰⁾ そこで、その複数の意味が互いにリンクしている状況を図で示すことができれば、学習者に、その多義オノマトペの持つ意味概念の全体像を視覚的に捉えさせることができるのではないかと考える。

4.1 「ごろごろ」の場合

上の考え方に基づいて、「ごろごろ」を例に、複数の用法とそれらの意味的関連を示したものが【図1】である。それぞれの用例が書き込まれた楕円を互いに結ぶ実線は、それらの間に、比喩的理解に基づく意味の派生や拡張など、何らかの意味的なリンクが考えられることを示している。¹¹⁾

図の左方にある「雷がごろごろ鳴る」「猫がごろごろのどを鳴らす」は、五感のうち聴覚で捉えたと思われる、いわゆる「擬音語」としての用法である。そこから派生してきた図の左下方の用例、「ごろごろうがいをする」「お腹がごろごろする」は、聴覚に触覚も加わった用法である。図の上部中央の用例「丸太がごろごろ転がる」は聴覚に視覚的な要素が加わった、いわゆる「擬音語」と「擬態語」の中間的な用法となっている。しかし、そこからリンクする「背中の荷物がごろごろ当たる」「目にごみが入ってごろごろする」になると、「擬音語」としての用法はもはや失われ、触覚のみで捉えられた用例となる。「背中の荷物」や「目の中のごみ」は「丸太」とは質的にも量的にもかけ離れているようであるが、実際荷物がごろごろと動いて背中にぶつかる時、また目の中に異物が入ってそれが実際よりとても大きく感じられるというとき、その異物が動いて当たる感触を、「丸太」が転がるが如くと大げさに表現しているものと思われる。

次に、「河原の石」の用例では、「丸太」の用例において見られたような「回転運動」という意義素はなくなり、石がどこかから転がってきた結果、ただそこにたくさん放置されている様子が視覚で捕らえられるだけである。もちろんそこには音も聞こえるわけではない。そして、ここから「河原の石」のように無用のも

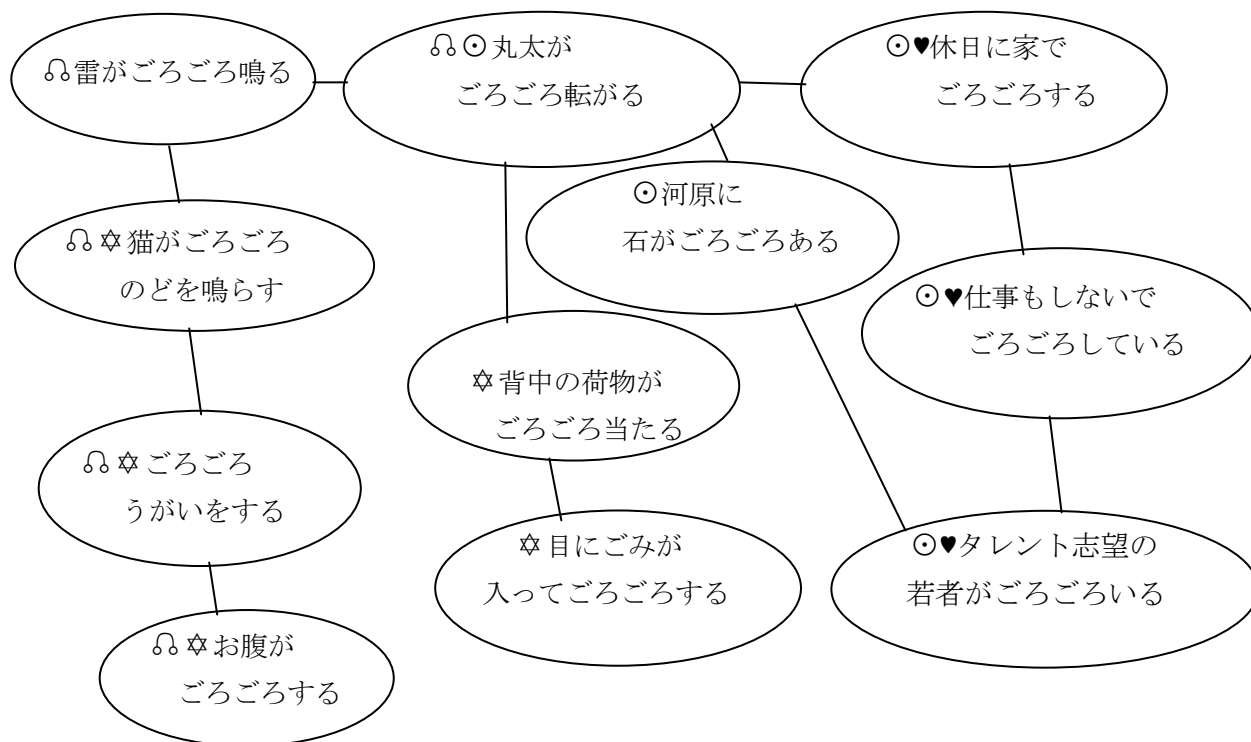
のが多数あるという意味で、「タレント志望の若者がごろごろいる」のような抽象的な意味に派生していくことになる。

一方、図の右方の用例「休日に家でごろごろする」は、あたかも「丸太」が転がっているかの如く、人が家の中で何もせず寝転がっている様子を表す。そして、その状態が休日のみならず、日常的になっている様子を表す意味に転化したのが、「仕事もしないでごろごろしている」の用例である。

以上、考察した通り、多義オノマトペにおける意味の派生や転化は、聴覚や視覚、触覚など複数の感覚間にまたがり、またそれらの感覚を共有することもあるため、本来、平面的な図で示すことは困難である。しかし、ここでは学習者が少しでもその意味の派生と転化、またお互いのリンクの様子を視覚的に見てとることができるよう、敢えて図として示すことを試みた。図の中のアイコンは、それぞれの用例がどのような感覚に基づくものであるかを示している。

【図1】「ごろごろ」の意味・用法の広がり

♫：聴覚 ⊙：視覚 ☆：触覚 ♥：抽象化

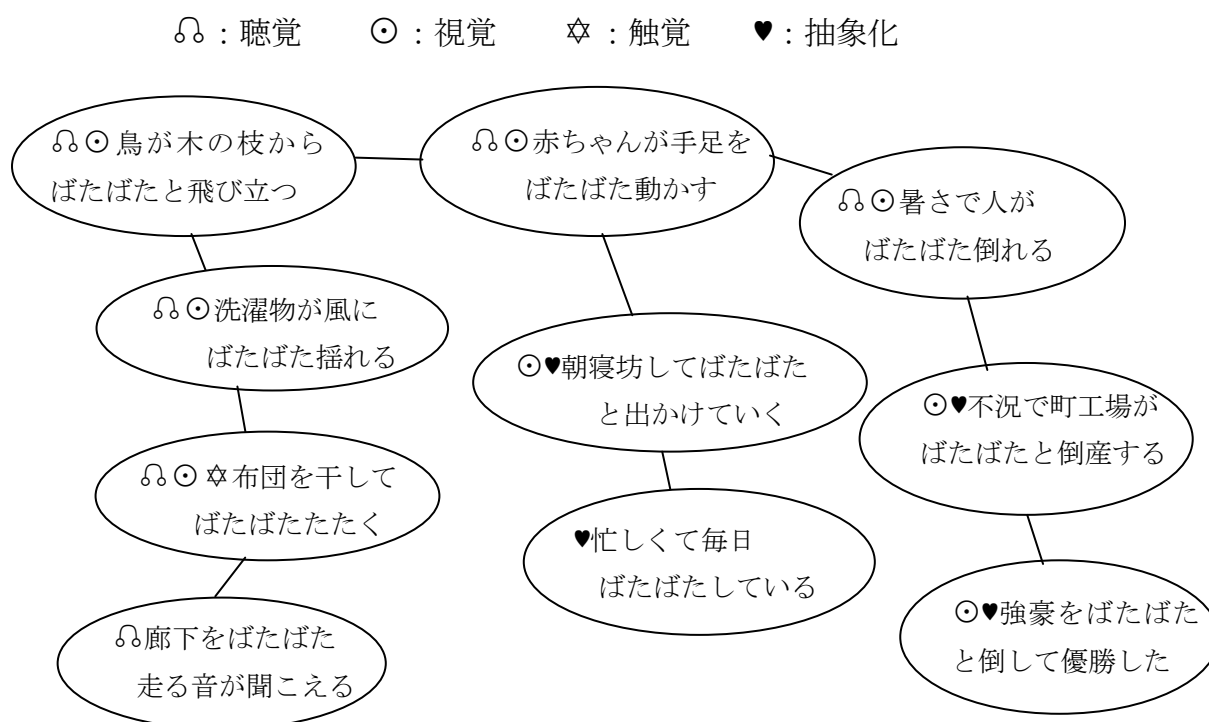


4.2 「ばたばた」の場合

「ごろごろ」と同様の方法で、「ばたばた」という多義オノマトペの意味・用法のリンクと広がりを見てみよう。「ばたばた」の場合は【図2】のようになると思われる。

「ばたばた」というオノマトペの原義は、鳥が飛び立つときの羽音と羽をせわしく動かす様態であると思われる。その羽の音と動きから、比喩的に旗や洗濯物等が風になびくときの音と様態を表す用法が生まれる。またそこから、干したふとんをたたく音とふとんたたきの動きや、廊下を走る靴音とその足の動きを表す用例につながる。一方、羽の動きは、人や動物が羽同様に手足をせわしく動かす様子を連想させるが、「赤ちゃんが手足をばたばた動かす」の用例では、せわしない動きは示唆されるが、音は直接には聞かれない場合もある。さらに、そのせわしない動きという意義素から、人が忙しそうに動き回る様子を表す「ばたばたと出かけていく」や、さらには、「忙しくて毎日ばたばたしている」のように直接目の前にそのような動きが見られない抽象的な用例にまで派生していく。一方、「暑さで人がばたばた倒れる」という用例では、倒れるときの音や様子が示唆されると同時に、複数の人が次々に倒れるという連続的な動きが捉えられている。この「連続性」が、「ばたばたと倒産する」や「強豪をばたばたと倒す」などのさらに抽象化された用例につながっていると考えられる。

【図2】「ばたばた」の意味・用法の広がり



このように、多義オノマトペにおける意味の派生や拡張という現象を図で示すことによって、多義語の意味の広がりや関連を学習者に視覚的に伝えることができるのではないだろうか。

5. 多義オノマトペの指導にむけて

5.1 日本語教育における語彙指導の問題

日本語教育、特に初級から中級前期の段階においては、オノマトペに限らずある種の語群が意識的あるいは無意識的に外されていると思われる。そこで考えなければならないことは、そのような語彙は習得する必要があるのか、あるいは、習得していないことで学習者に何か不都合が生じる可能性があるのかということであろう。これまで、日本語教育の初級において学習されるべき語彙というと、『日本語能力試験の出題基準』をはじめとした、多くの教科書に採用されている基本的な語という枠組みで捉えられてきたと思う。しかし、学習者が実際にどのようなコミュニケーション場面において、どのような語彙が必要になるのかという観点からの研究は、まだ十分にされているとは言えない。

一方、文型教育においては、川口（2003）によって新しい教授理念が提唱されている。それは、これまで、文型積み上げ式教授法で「文法」を学習することと、コミュニカティブ・アプローチを取り入れた「会話」¹²⁾教育は相反するものとされてきたのだが、今後は「文法」と「会話」がより有機的につながられる必要性があるという教授理念である。具体的には、「文法」を「会話」の表現のためのツールと捉え、特定の文法項目を教える際には、それで何が表現できるのかを考えて指導せざるを得なくなる、という考え方である。

筆者は、ここでいわれている「文法」という枠組みが、そのまま「語彙」に置き換えられるのではないかと考える。すなわち、「文法」と同様、「語彙」も、様々な場面における「会話」表現のためのツールとして捉えられるべきであり、学習者の表現活動を支えるための「語彙」をどのように指導していくのかという観点から考えなければならないのである。

5.2 語彙指導における「文脈化」

では、語彙教育において、どのような具体的な方策が考えられるだろうか。ここでもやはり、川口（前掲）のいう「文脈化」(contextualization)という概念が重要となってくる。つまり、語は、「誰が・誰に向かって・何のために」表現するのかという「文脈化」の中で初めて真の意味を持つ、という考え方である。

例えば、「ごろごろ」「ばたばた」という語を導入する際、ただ「雷はごろごろ鳴ります」「日曜日は家でごろごろしています」、あるいは「忙しくてばたばたし

ています」いう例文を示しても、それはいったい誰が、いつ、どんな場面で使うのかということが学習者には伝わらないだろうということである。つまり、この例文で、学習者は「ごろごろ」や「ばたばた」という語の意味を、説明されることによって理解することはできても、自らの「会話」表現のためのツールとして使用するということまではいかないのではないかと思うのである。したがって、語彙の指導にも、次に示すような「文脈化」が重要であると言えよう。

5.3 多義オノマトペの「文脈化」の例

これまで見てきた通り、多義オノマトペは複数の意味と用例を持つのであるから、指導する際には、ある文例において、そのオノマトペが複数の意味のうちどの意味で用いられるのかということを示す必要がある。そしてそのためには、上で述べたような「文脈化」が非常に重要となってくる。以下に「ごろごろ」を「文脈化」によって示した例を挙げる。

(1) (友達とハイキングに行って山道を歩いているとき、遠くで雷の音が聞こえた。) 私はみんなに、「大変だ。雷がごろごろ鳴っているよ。危ないから早く山を下りよう。」と言った。

(2) (父は毎週日曜が休みだ。休みの日はたいてい朝から寝ころがって新聞を読んだりテレビを見たりしている)。私は父に、「お父さん、家でごろごろしてないで、たまには外に出てスポーツでもしたらどう？」と言いたい。

同様に、「ばたばた」の場合は、次のような「文脈化」が可能であると思われる。

(3) (庭に干した洗濯物が、強い風のために今にも飛びそうになっている。)

私は母に、「あれ、見て。洗濯物が風でばたばたして飛びそうになっているよ。ちゃんと止めたほうがいいね。」と言った。

(4) (明日引っ越しをするという日に、高校時代の先生が電話してきて会いたいと言った。) 私は先生に、「すみません。明日引っ越しをするので、今すぐばたばたしているんです。また私のほうからお電話します。」と言った。

このように、個々の意味を具体的な場面を伴う「文脈化」された用例をもって示すことによって、学習者はそれぞれの語を「会話」表現のツールとして自らの「文脈」にあてはめて積極的に使っていけるのではないだろうか。¹³⁾

6. まとめと今後の課題

オノマトペは、多義であるかないかに拘わらず、その意味や語感を学習者に伝えることが非常に難しい語群である。今回、「ごろごろ」「ばたばた」を例に、多義オノマトペの複数の意味・用法を図によって視覚的に示すということを試みた。このような図示は、学習者が、あるオノマトペに、複数の意味・用法があること

を学んだ段階で示すとより効果的であると思われる。また指導の時期としては、図の上層にある用法が初級後半から、中層以下が中級前半から導入可能であると考えられる。今後は、他のオノマトペについても同様の図示が可能であるのか、またそれが学習や指導にどのように有効であるのか、より深い考察をしていく必要があると考える。また、文法と同様、語彙の指導にも「文脈化」という概念を取り入れる可能性について論じたが、これについてもさらに実践と検証を行なっていきたい。

オノマトペをどう教えるかという問題は、広く、日本語教育における語彙教育全体に関わる問題である。オノマトペについての考察を第一歩とし、今後引き続き、日本語教育における語彙とその指導法を研究の課題としていきたいと考える。

-
- 1) 三上 (2003) における調査とそれに基づく考察による。
 - 2) 松中 (2002) p.142 参照。但し、() 内の用例は筆者が加えたものである。
 - 3) 本稿においては、多義語が意味の派生・拡張によって複数の意味を持つようになったというとき、その複数の意味の分析はあくまで共時的観点から行なうこととする。
 - 4) ここに挙げた基本的と思われるオノマトペの選定は、三上(2003)において行なった調査と考察をもとにしている。
 - 5) 原典では、それぞれの意味の用例として、2、3例ずつが挙げられているが、ここでは各1例ずつのみ載せている。
 - 6) ここでの分類は、田守・ローレンス (1999,pp.47-92) を基にしている。ただし、「引用用法」「文外独立用法」「動詞省略用法」などはここでは取り上げていない。また、d.「名詞修飾用法」は、田守・ローレンス (前掲) では「形容動詞的」なオノマトペに分類されている。e.「形容詞的用法」は筆者が加えたものである。
 - 7) 『現代擬音語擬態語用法辞典』では、各語の意義素を様々な用例から帰納的に導き記述するという方法をとっている。
 - 8) この教材には、解説として意味、例文のほかに、意味の英語訳・中国語訳、用法、同類語 (「べとべと」)、動詞 (「べとつく」)、類義語 (「どろどろ」「ねばねば」) 等の記述もある。
 - 9) ここでの意味と用例は、『擬音語擬態語使い方辞典』による。ただし、紙幅の関係で、例文は各1例ずつしか挙げていない。
 - 10) 〈注3〉で述べた通り、本稿では、ある多義語がそもそもどのような意味を持つ語であり、またどのようにその意味が派生・拡張してきたかという歴史的な考察は行なわず、あくまで現代語における意味・用法だけに着目することとする。
 - 11) 山梨(2000, pp.195-199) では、動詞「つける」を例に、多義語が基本的な意味から比喩的な拡張のプロセスを介して、多義性のネットワークを形成するモデル

が示されている。そこでの意味の拡張関係は、破線の矢印によって示されているが、本稿では、多義オノマトペの意味のリンクが双方向である可能性も考慮して、矢印のない実線で示すこととした。

12) ここでいう「会話」とは、「コミュニケーション能力育成」を象徴している。

13) 指導に際しては、さらに「個人化」(personalization) という概念が重要になってくるのであるが、ここでは触れない。詳しくは、川口 (2003) を参照のこと。

【参考文献】

- 阿刀田稔子・星野和子(1993) 『擬音語・擬態語使い方辞典』創拓社
- 苧阪直行 (1999) 『感性のことばを研究する』新曜社
- 川口義一 (2003) 「文法はいかにして会話に近づくか—「働きかける表現」と「語る表現」のための指導—」第5回フランス日本語教育シンポジウム発表論文
- 金田一春彦(1978) 「擬音語・擬態語概説」 浅野鶴子編 『擬音語・擬態語辞典』角川書店 pp.4-25
- 国広哲弥 (2002) 「語義の構造」 斎藤倫明編『朝倉日本語講座④語彙・意味』朝倉書店 pp.164-165
- 鈴木智美 (2003) 「多義語の意味のネットワーク構造における心理的なプロトタイプ度の高さの位置付け—多義語「ツク」(付・着・就・即・憑・点) のネットワーク構造を通して—」『日本語教育』116号 pp.59-68
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ(1999) 『オノマトペ—形態と意味—』くろしお出版
- 富川和代著、永保澄雄・稲垣宏明監修(1997) 『らくらく覚えてどんどん使おう 絵で学ぶ擬音語・擬態語カード』スリーエーネットワーク
- 飛田良文・浅田秀子 (2002) 『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
- 文化庁(1994) 『外国人のための基本語用例辞典 第三版』財務省印刷局
- 松中完二 (2002) 「現代の多義語の構造」 飛田良文・佐藤武義編『現代日本語講座第4巻語彙』明治書院 pp.142-146
- 三上京子 (2003) 『日本語教育におけるオノマトペ指導の現状とその方策』早稲田大学大学院日本語教育研究科提出修士論文
- 森敏昭編著 (2001) 『おもしろ言語のラボラトリー』北大路書房
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版
- 呂 佳蓉 (2003) 「比喩としてのオノマトペ—「ころころ」と「圓滾滾」—」日本認知言語学会第4回大会 CONFERENCE HANDBOOK pp.15-18

(朝日カルチャーセンター、早稲田大学大学院博士後期課程)